

## 忙しさについて

村田 全

昨年の初夏、私は二年ぶりにパリから帰ってきたが、物価の上昇もさることながら、しばらくは人びとの忙しさ、その動きの慌しさがしきりに気になった。外から見ての動きばかりでなく、例えば学問のような内的な仕事についてもである。この頃その印象が少し薄れてきたと思つたら、どうやらそれは、こちらがその中に巻き込まれたためらしい。

もちろん忙しさ、慌しさを一概に悪いと言うのではない。事実、数学史のように外からはのんびりやっていけそうに見える学問でも、本気でやるとやると、のんびりはしておれないもので、そうした忙しさは所詮どの仕事にもついてまわるものなのであろう。ただそれにしても、ばたばた走り廻るような忙しさと、何か本物である忙しさとは厳に区別せねばならない。日本へ帰ってからの忙しさが、本筋のものなのかどうか、それがいささか気にかかるのである。

私がパリで所属していたのは、国立図書館の北隣りにある「科学史・科学哲学研究センター」で、有名なオペラ座の東、数百メートルの所にある。建物自身、十七世紀に造られた歴史的なものだが、観光ルートを外れているため、別に見に来る人もない。人間の身長の一倍半はありそうな重々しい扉や、三階の広間の壁一杯に掛けられた十九世紀もの大きい絵など、研究所というよりは博物館か、むしろメリメあたりの歴史小説に出てくる館やかたのような感じの建物である。雰囲気の中に歴史が生きている、などという気障っぽいかもしれないが、少くとも現在の日本

ではまず求められない環境であり、こんな処にいと、ばたばた走り廻る気にはとてもならない。

その半面、当然といえば当然ながら、仕事の能率の面から見ると、それはあまり有難い建物ではない。冷暖房のことなどは言わぬとしても、困るのは個室の乏しいことである。実際、所長秘書のための狭い一角を除いて、所長のタトン教授の専用私室すらない。別に地下鉄で幾駅か行った所に、二つばかり研究室が確保されてはいるのだが、生活の不規則な私の場合など結局使いものにならず、用のある時以外は専ら自宅にこもる結果になった。

もっと意外だったのは複写設備の貧弱さで、日本では十年以上も前に使われなくなったような旧式の機械が一台あるきりであった。これを使う時には、専任の婦人が暗幕を引いた上で一ページあたりのコピーに一分だか二分だかかけている。いくら史料原典が近くにある国でも、これは少々忙しくなさすぎるというものであろう。もちろん国立図書館やパリ大学に行けば最新鋭の複写設備は整っているのだが、本拠に設備のないのは何としても不自由であった。科学史研究などに金の出ないのは日本に限らないということだけのこともかもしれないが、この辺の悠長さはさすがの私でも羨む気にはなれなかった。

別の面で、特にパリに着いた頃に一番困ったのは昼休みの使い方であった。研究センターは十二時から二時まで閉館で、その間は一同が締め出される。慣れない内は、食事をすませてもなおたっぷり一時間以上の時間があり、仕方なく葡萄酒ばかり飲んでいたら、三時からのセミナーで完全に眠ってしまったこともある。ところが一旦この習慣に慣れてしまうと、たっぷり時間をかけて食事を楽しみ、あちこち散歩でもした上で、やおら仕事に取掛るというのは、結構な社会慣習だと思ってしまうようになった。心掛けてはみたものの、忙しい日本でこの真似だけはできそうにない。

こうしたあれこれの経験の中で特に忘れられないのは、パリを離れる間に、センターのコスタベル教授と交わした短い会話のことである。コスタベル氏はライブニッツの研究などの著書のある近世科学史の専門家で、根は親

切な人だが、仲々皮肉のうまい一言居士である。私の話に対してよく鋭い批判をしてくれて、その点大いに啓発されたのだが、困ったことに、こちらのフランス語の割にそちらの表現がうますぎて、直ちにピンとこないことがちょいちょいあった。私が集合論の創始者カントルの用語の分析について話した時の批評などは、その典型的な例で、この時ばかりは、同席のフランス人の中にも私の肩を持ってコスタベル氏の説に疑問を呈する人がいたほど、その批評は難解に聞こえた。コスタベル氏のその時の批評は、要するに、私が集合論のカントルの多用する用語を中心に分析を進めたのに対して、それでは不十分で、一回しか使われていない用語など、頻度の少ないものも考慮せねばならないというようなことであった。私はその本意が計りかねて、二三度たずね直してみたのだが、何だか批評のための批評のような気がして、深入りしなかったのである。

ところが帰国の日が迫った頃、それが何となく気になってきたので、私はもう一度そのことをたずねてみた。例の大きな絵のある広間でのことである。コスタベル氏はどこかから、アダン・タンヌリ編の厚ぼつたい『デカルト全集』を二冊ばかり持ち出してこられ、あちこち開いて見せられた。見ると驚いたことに、『幾何学』『気象学』『光学』などの各ページに、それぞれの中で一度しか使われていない用語が、何度も使われている用語と共に、一々色を区別してアンダー・ラインしてあったのである。コスタベル氏によれば、これによって概念形成の過程が明らかにされるといふ。なるほど或る論文で一度だけ使われた言葉が、次の機会に何回か使われ、次いで術語として固定されるのが明らかになれば、それは確かに重大な論点になる。問題はそういうことがいつでも現われるかというようなことだが、それにしても、或る言葉が或る論文の中で「一度しか使われていない」ことを確定するというのは、まことに恐るべき仕事であって、私はその努力には完全に胃を脱いだ。

「これはいつ発表されるおつもりです？」

「さあ、何年かかりますかな。ハ、ハ、ハ」

夕方の広間の中での、この「ハ、ハ、ハ」には、ちよつと忘れられない響きがあった。

学問というものは、本来このような悠々として道を楽しむ態の蓄積の中で形をなすものであろう。学問を楽しみたいなどというと叱られそうな気配もある今日この頃だが、私は、昼食と共に、こうしたことの楽しめる忙しい身でありたいと思う。

(新幹線東京、博多間開通の日)

- 初出は筑摩書房の小冊子『ちくま』第七二号（一九七五）である。村田全先生が立教大学を定年退職するにあたり開催された「村田全教授定年退職記念会」で頒布された小冊子に収録されたものを底本とした。
- PDF化には $\text{\LaTeX 2}_{\epsilon}$ でタイプセットを行い、`dvipdfmx`を使用した。

村田全氏のその他の著作については、

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

に収録してあります。

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、

「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiromeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。